



Chapter

第三章

## 遊びの質を高める保育のあり方 (現場の声を聞きながら)

- 3-1-1 遊びの質を高める保育のあり方
- 3-1-2 パネルディスカッション
- 3-2 園種別ワークショップ：  
「遊びが学びの保育」の実現を阻むもの
- 3-3 フリーディスカッション  
現場と専門家の議論：  
「遊びが学びの保育」の実現に向けて

# 3-1-1

遊びの質を高める保育のあり方

## 遊びの質を高める保育のあり方

河邊貴子

Kawabe Takako …… 聖心女子大学教授



聖心女子大学文学部教育学科教授。教育学博士。東京都公立幼稚園において12年間教諭として保育に携わった後、東京都教育委員会指導主事などを経て、現職。主な研究テーマは、保育記録のあり方や遊び援助論。日本保育学会理事、「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」作成協力者などを歴任。主な著書に『保育記録の機能と役割～保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言』（聖公会出版）など。

### ● 遊びを中心とした幼児教育をどう浸透させていくか

子どもにとって遊びが重要なことに異論がある人はいないだろう。しかし、目に見える成果を求める風潮や園児獲得のための方策の優先、また遊びの意義が理解されにくいことなど、さまざまな理由により、遊びを中心とした幼児教育は必ずしも定着していない。

だが、ここで改めて、子どもにとっての最善の利益は、豊かな遊びによる日々の生活の充実だと強調したい。それを実現するためには、どのような生活や教育が必要であるか、今一度熟考する必要があるだろう。

私は多くの園内研修会に参加しているが、保育における遊びの位置づけの問題については、3つに大別できると感じている。

1つ目は、遊びを教育内容として位置づ

けてはいるものの、保育者間で遊びの質の捉え方が共有されていないタイプである。既存の幼稚園や保育所が統合された形の認定こども園に顕著で、保育者間の考え方のすり合わせができておらず、環境構成や援助の手立ての個人差が大きかったといった問題が見られる。

2つ目は、「遊びは子どもの自発性によるもの」という考え方をはき違え、「放任」しているタイプである。保育者が、子どもが遊びの中で経験していることを読み取って援助しないので、子どもは同じ遊びを繰り返すことが多く、遊びが停滞している。

3つ目は、遊びを教育内容と捉えず、「休み時間」的に扱うタイプである。教育とは保育者が一斉に教授するものと捉えているので、子どもが遊びのテーマや場、仲間を自己選択し、課題解決に向かう活動に価値がおかれぬ。そのため、子どもの能動性

が発揮される場面は限りなく少ない。

3タイプいずれかに属する園が少なくない現状で、遊びの重要性を浸透させるためには、遊びと学びの関係性を十分に説明する必要があるだろう。

遊びの中で子どもの内面の変化を観察すると、遊びと学びの原理は重なっていることに気づく。子どもは、初めから明確な目標を持って遊ぶのではない。対象とかわる中で、次第にやりたいことの方が明らかになり、見通しを持って遊びを展開させていく。これは「混沌」の中に「秩序」を見出す営みであり、「学び」そのものといえよう。

遊びの重要性を説く上では、目の前の子どもの姿を通して語るだけではなく、将来的な有用性を説明することも大切である。これについては、既に多くの研究により根拠が示されている。一例を挙げると、鳥取大学の研究「すくすくコホート鳥取」では、幼児期からの追跡調査により、社会性や学力などの観点から幼児期の遊びの重要性を指摘している。また就学前に十分に遊ばせることが、いわゆる受験学力を高めると指摘する研究もある。受験学力が価値判断の基準として妥当かどうかは議論を要するが、今の社会では一定の説得力を備えていることは確かだろう。

## ● 子どもは遊べば遊ぶほど能動的な学び手として成長する

次に、遊びを掘り下げて考え、援助のあり方を探っていこう。

遊びの定義は、「自発性（自分からすること）」「自己完結性（満足するまですること）」「自己報酬性（「楽しい」という感覚など自分に報酬を与えること）」の3つに集約されることが多い。しかし、これらだけでは、一

日中テレビゲームに没頭するケースも当てはまるため、他の要素も合わせる必要があるだろう。それが何であるかは、遊びの構造を考えると、自ずと見えてくる。

遊びとは、「できるだろうか」という緊張感と、「できた!」という解放感を交互に味わいながら、ある種の能力や見通しを獲得するプロセスと言える。出発点は興味・関心を持った身近な環境とのかかわりであり、遊び手の自発性に支えられて展開していく。

自発性は、面白い・楽しいといった「快」の感情と分かちがたい。子どもは遊びをもっと面白くしようと、ヒト・モノ・コトに主体的にかかわろうとする。かかわりが深まるにつれ、遊びの面白さは増し、興味・関心がさらに高まるという循環が生まれる。この繰り返しにより、子どもは発達に必要な経験を積み重ねていく。そして、遊べば遊ぶほど能動的な学び手として成長し、その後の成長を支える土台がつくられていくのである。こうしたプロセスの深まりが、今回の主題である遊びの質の高まりと言ってよい。

遊びはパターン化により停滞するため、随時、新奇性を取り込み、より面白くするプロセスが重要になるが、それは子どもの力だけでは難しく、大人の援助が必要になる。そこに保育者の最大の存在意義がある。

保育者に求められるのはまず、遊びが幼児教育の中核であり、遊びの質を高めることが子どもの発達の保障につながるという認識を持つことだ。その上で子どもがヒト・モノ・コトにどうアクセスしているかをよく観察、理解し、その延長上に援助の可能性を見出し、環境をデザインする必要がある。

## ● 遊びの志向性の延長に援助の可能性を見出す

そうした援助がどのように行われるべき

か、実践を交えて説明しよう。

記録的な大雪に見舞われた後、神奈川県  
の私立幼稚園を訪問すると、子どもたちは  
園庭で雪遊びを楽しんでいた。さまざまな  
遊びが展開されていたが、5歳児のグル  
ープは屋外に置かれたマットの型によっ  
てできた雪のかたまりを発見し、一人の「マ  
カロンみたい」という言葉をきっかけにマ  
カロンづくりが始まった。様子を見守っ  
ていた保育者は、ある子どもの「マカ  
ロン屋さんをしよう」という言葉に反  
応し、絵の具を提案した。保育者のね  
らい通り、子どもたちは色付けに夢中  
になり、「これはストロベリー・マカ  
ロンね」などと遊びを展開させた。—  
写真①参照

他にも、雪を投げるなど体で楽しんで  
いたグループのそばでは、保育者が共  
感を示すことで、子どもたちが安心  
して没頭していた。また、かまくら  
づくりやソリ遊びでは、子どもたち  
の遊びに対するほんやりとしたイメ  
ージをはっきりとさせる言葉をかけ  
たり、技術的に難しいことを手助け  
したりして、遊びの志向性の延長に  
援助の可能性を見出していた。雪と  
いう偶発的な出会いから、子ども  
たちが遊びをいかに多様に展開  
させたかを示したのが図①である。

保育者の適切な援助があったからこそ、  
遊びをこのように豊かに展開した。保  
育者は子どもが遊びの中で目指して  
いることや

体験をしていることを十分に読み取る。  
その上で、子どもの達成感を重視し、  
どう足場をかけるかを考えることが、  
遊びの質を高めるためには極めて重  
要である。

## ◎ 自ら遊びの中に入り 遊びの輪郭を明瞭にする援助

次は一人の子どもが目の前の興味  
のあるものに入り込んでいく様子  
を見てみよう。

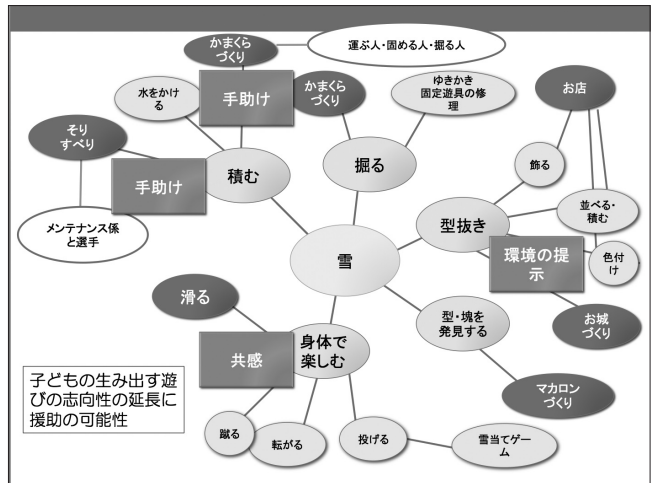
H児は、一人でコマ遊びをして  
いたが、それは本当にやりたいこと  
ではなかったようだ。保育室に二  
人の子ども（A児とB児）が入  
って来て、「本屋さんごっこをや  
ろう」と、積み木でお店を作り、  
本を並べ始めた。保育者がA・B  
児に「すごいね」と声を掛ける  
のを聞いたH児は、静かに本屋  
作りの手伝いを始めた。

保育者は、本屋ができたタイ  
ミングを見計らってお店に入  
った。そして「図書館カード  
を忘れたわ」と言うと、H児  
が「ここは本屋さんです」と反  
応。— 写真②参照 保育者  
が「そしたらお金を作るね」と  
製作コーナーに移動すると、  
H児はレジを作り始めた。「自  
分もやりたい」と、はっきりと  
言わないが、もっと積極的にか  
かわりたいようだ。

その間、A・B児は、「本屋でク  
ッキーが食べられるようにし  
よう」と、クッキーづ



写真①



図①

くりに移った。レジを完成させたH児は、「いちごクッキーはどう？」などと話しかけ、次第に活動の中心的な役割を担っていった。

— 写真③参照

H児の姿を通して、遊びに能動的にかかわる過程で、ヒト・モノ・コトへのかかわりが深まっていく様子がよく分かる。さらに遊びの中で「次はどうしようか」という自己課題が生み出され、協同性も深まっている。こうした遊びの背後には、自ら遊びの中に入り、徐々に遊びの輪郭が明瞭になるようにした保育者の援助がある。

## ●生活や遊びに連続性を持たせる

それでは、保育者はいかに具体的な援助

の手立てを講じればよいのだろうか。

私自身が保育者として現場にいた頃、豊かな遊びの展開に必要な要素として「遊び課題」と「他者とのかかわり」という2つの軸を設定し、子どもを捉えていた。一人ひとりの子どもが、2つの軸のどの位置にいるかを記録したのが図②である。これを「グリッド型記録」と命名した。

4つの象限は、次のように分類できる。

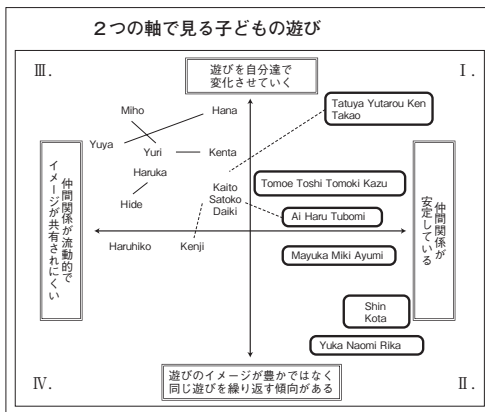
- 第1象限 仲間とのつながりを楽しみ、遊びに共通のイメージを持てる。遊びが停滞すると、イメージを出し合い面白くしていく。
- 第2象限 友達関係は安定しているが、遊びを面白く作り変える経験が少なく、



写真②



写真③



図②

同じ遊びを繰り返しやすい。

- 第3象限 安定した仲間を築いておらず、遊びの充足感を十分に味わえない。
- 第4象限 遊びに対する意欲や主体的態度が不十分。また友達関係も安定しておらず、遊びの課題を持ちにくい。

この4象限をもとに、援助の大まかな方針を検討した。例えば、第1象限の子どもは、少し引いた場所から見守り、困った時に手を差し伸べれば大丈夫。一方、第4象限はしっかりと向き合い、能動的な学び手にする援助を続ける必要がある、といった具合だ。集団保育では、一人ひとりの子どもを理解するとともに、こうした典型的な見方も必要だと感じる。

続いて、一人ひとりへの具体的な援助は、以下の5つの視点を踏まえて検討した。

- ①目的意識の深化（自分のやりたいことができているか）
- ②状況を再構成する力（遊びの面白さに向け、絶えず状況を作り直そうとするか）
- ③環境へのかかわり（遊びに使うモノや場の必要性が分かり、能動的にかかわれるか）
- ④情報の選択と自己決定（他者の動きを見たり、言葉を聞いたりして、自分の中に

さまざまな情報を取り入れているか）

- ⑤他者とのコミュニケーション（思いや考えを、他者にどう伝えようとしているか）

2つの軸で大きく捉え、5つの視点で詳細に分析するという方法で、遊びの質を高める援助を生み出していたのである。

遊びを幼児教育の中心に据える上では欠かせない、心理学者であるパセック氏の提唱するGuided playの考え方にも言及したい。

Guided playは、大人は遊びの文脈を開始させるが、その中で「指示」はしない遊ばせ方である。大人の役割は、支配的ではないが積極的で、子どもの意識を明確にするフィードバックや質問をする。それにより、子どもの喜びや自尊心、自信、社会的な絆が高まり、実行機能や学力を向上させると考えられている。私が考える「遊びを中心とした保育」との共通点は、子どもの能動性を尊重するという点である。しかし、Guided playでは「何を学ばせるか」は大人の側にイニシアチブがあるように読み取れる。子どもを能動的な学び手に育てるという大きな目標を大人は保持していたとしても、学びのイニシアチブはあくまでも子どもの側にあるのではないか。Guided playはFree playと直接教授の中間と位置づけられているが、そうではなく、子どもの何を学ぼうとしているかを理解することから必要な大人の配慮を考えるべきではないかと思う。

最後に強調したいのが、幼児教育の中では、生活や遊びが単発的、分断的にならないようにすべきということである。そうしないと、子どもが生み出す文脈はつながらない。幼児教育には「プロセスが大事」なのである。今日の体験から明日の興味が生まれるような連続的な生活を送るために、子どもと保育者が相互にかかわって創り出す遊びのプロセスを重視していただきたい。

# 3-1-2

## パネルディスカッション

遊びの質を高める保育のあり方

### panel discussion

司会●**榎原洋一** Sakakihara Yoichi …………… CRN 所長、お茶の水女子大学大学院教授

パネリスト●

**河邊貴子** Kawabe Takako …………… 聖心女子大学教授

**上垣内伸子** Kamigaichi Nobuko …………… 十文字学園女子大学教授

**大豆生田啓友** Omameuda Hirotomo …………… 玉川大学准教授

### 遊びの質を高める 保育のあり方

#### 「誘導保育」に通じる 「Guided play」の保育観

**榎原●** 本日はよろしくお願ひします。河邊先生のご講演では、最後にGuided playについて言及されました。Guided playは、米テンブル大学の発達心理学者キャシー・ハーシュ＝パセック氏のグループなどが提案していますが、児童心理学者である倉橋惣三が提唱した「誘導保育」という保育観に似たものを感じます。

**大豆生田●** 河邊先生は、雪という環境の中で、子どもが協同して遊びが広がり深まったりした事例を紹介されましたが、あの場面での保育者の援助は、倉橋の考え方に通じる面があると思います。倉橋は、「生活を、生活で、生活



に」という言葉を掲げ、「さながらの生活」が幼児期の基盤として大切だと唱えました。子どもが登園したら、自分で好きな遊びを選んで過ごす時間をまず大事にする。それは好き放題にさせるという意味ではなく、倉橋の言葉を借りれば、「自由と設備」が与えられています。「設備」は「環境」を意味すると捉えると、雪という環境に「自由」にかかわる状況が、あのような多様な遊びを生み出したわけのです。

倉橋が「さながらの生活」を重視した根底には、子どもは自由に学び、自己を充実させる力があるという信念がありました。主体的に環境にかかわって遊び、学ぶ力を尊重したのです。しかし、当然、上手く遊びに入れない子どももいます。そういう場合は、自己充実を求めるだけでなく、何らかの手助けが必要になり



**大豆生田啓友**：玉川大学教育学部乳幼児発達学科准教授。青山学院大学大学院文学研究科教育学専攻修了後、青山学院幼稚園教諭などを経て、現職。専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。日本保育学会理事、NPO法人びーのびーの理事などを兼任。主な著書に、『支え合い、育ち合いの子育て支援—保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論—』（関東学院大学出版会）、共著に『子どもを「人間としてみる」ということ』（ミネルヴァ書房）など。



河邊貴子  
聖心女子大学教授

ます。

倉橋の誘導保育論の中でも、保育者の援助により、遊びや生活に筋のようなつながりを持たせることの大切さが述べられています。雪遊びの事例でも、保育者が遊びの様子を読み取りながらかかわることで、遊びを単発で終わらせず、つながりを持たせていました。そこでは、河邊先生が話されたように、子ども主体と大人主体の二項対立ではなく、個々の子どもと保育者との相互のやりとりが大切であると改めて感じました。

河邊先生に一つ質問です。絵の具という刺激的な素材は遊びに大きな影響を与えますが、保育者はどのような意図や思いから、子どもたちに提案したのでしょうか。

**河邊**● 遊びの中で生じた見通し、それから目的が明確になってきたことを踏まえ、「ここだ！」と考えて提案したのでしょうか。確かに大きな賭けだったと思います。もし3歳児に提示していたら、遊びがぐちゃぐちゃになってしまったでしょう。保育者は、床の上にひっそりと置くようにして絵の具を提示し、あくまで子どもの思いを尊重する姿勢でした。そこには深い子ども理解と同時に、絵の具という対象物に対する保育者自身の経験や理解があったのだと思います。

子どもと一緒に雪の滑り台を作る場



面では、若い保育者自身に雪遊びの経験があまりなかったようで、怖がってなかなか高くしませんでした。それを見ていたベテラン保育者が、「もっと高く大丈夫」と声をかけていました。そういう点には、保育者自身の経験の差が表れます。

## 「自分で選んだ」と思える遊びの選択が重要

**上垣内●** 河邊先生のご講演をお聞きして考えたことをいくつかお話しさせていただきます。

Guided playに関して、大人が文脈を開始させるというお話でしたが、遊びの選択というプロセスは、倉橋の誘導保育でも非常に慎重に考えられています。遊びは子どもの興味・関心に始まり、その時代の社会・文化状況に応じ、家庭や社会との繋がりの中から選ばれ、そこには保育者自身の子どもの時代の原体験も織り込まれます。そのように子どもを尊重する意思があるからこそ、子どもは「先生から与えられた」とは思わず、「自分がやりたいくて始めた」という感覚を持てるのでしょうか。そうした意味からGuided playを考える上では、特に遊びの選択は重要であると感じました。

またGuided playにおいては、大人からのフィードバックや深い質問を受けることで学ぶというお話でしたが、環境を通して保育することを考えると、モノやコトにもそのような機能があるのではないかと思います。対象と深くかかわることは、まさに対象と対話することです。対象そのものが、子どもに対してフィードバックをもたらしたり、質問を投げかけたりすることもあるでしょう。ですから、保育者の役割はもちろん重要ですが、遊びの対象そのものを大切にすることがあると思いました。



**上垣内伸子**：十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科教授。お茶の水女子大学大学院児童学専攻修了後、国立総合児童センター「こどもの城」小児保健部心理相談員などを経て、現職。専門領域は保育学、発達臨床学で、保育者養成、および保育という臨床的な場での個々の子どもの発達と心的世界の理解やそれに対する援助のあり方を研究している。OMEP（世界幼児教育機構）日本委員会理事、財団法人こども未来財団理事などを兼任。主な著書に、『自由保育とは何かー形にとらわれない心の保育』（フレーベル館）など。

倉橋は、「充実指導」という言葉を使っていますが、保育者によるフィードバックや質問に教育的な意図が見え隠れすると、自己形成力の手助けにはならないと考えました。保育者の意図が表に出ず、あくまで子どもが自分で気付いたかのように感じられる投げかけをすることが、充実指導なのだと思います。

倉橋は、誘導保育は一人の保育者ではできず、園という環境を生かし、集団や仲間、空間が持つダイナミズムが可能にすると述べています。この点について、私も同じことを考えています。

## 一人ひとりを読み取る記録と俯瞰的な記録の両方を持つ

**神原**● 河邊先生は、これだけ遊びの重要性が言われながら、遊びを中心とした保育がなかなか定着しない状況を指摘されました。一方で、雪遊びをする子どもに絵の具を差し出して遊びを豊かにするようなかかわり方ができる保育者もいるわけです。こうした資質は、一体、どのように身につくのだろうかという疑問を持ちました。保育者の養成課程の課題がかかわってくるのかもしれませんが。

**河邊**● 養成課程も関係しますが、それより園長の考え方が大きいと思います。どのような保育をしたいのか、とことん考える必要があります。絵の具を提案した結果、遊びが広がったわけですが、保育者の頭の中には自身の経験を踏まえた見通しや予測があったのでしょうか。それがなければ、あの場面で絵の具は出さな

いと思います。

予測に反することや予測を超えることも、たびたびあるものです。そこで、まず保育者としての予測をしっかりと持つこと、そして実践においては、予測を横において、子どもが実際にどのように考え行動しているのかを観察すること、この2つを常に心の中に共存させることが大切です。上手く援助できない原因は、予測の範囲が狭い、保育者自身が遊んだ経験が乏しい、やらなければいけないことで頭が一杯、遊びの観察が不十分、などが考えられます。

**神原**● 記録の重要性も述べられていましたが、記録を通して、遊びを援助するスキルや感性は身につくのでしょうか。

**河邊**● 記録することはとても大切だと思います。ただ、惰性で記録するだけでは全く意味がありません。どのように記録すれば、必要なことが見えてくるかという試行錯誤が必要でしょう。

保育記録は、子どもを対岸に置くようにして、「あんなことをした」「こんなことをした」と書き連ねるだけでは、子どもと保育者との相互関係が生まれません。その時に自分がどう感じたか、何をしようと思ったか、実際に何をしたか、それを受けて子どもはどう変化したかなど、子どもとの関係性を踏まえた記録が重要です。

**大豆生田**● 雪遊びなどの事例を通し、保育者の心が動いて、ワクワクした思いで子どもの姿を見守っている様子が伝わってきます。遊びが広がっていく背景には、そうした保育者の思いがあるのでしょうか。

そんな生き生きとした情景を記録する方法として、エピソード記述があります。子どもとの関係の中で、保育者が感じたことや発見したこと、また個々の子どもの興味・関心や課題などを記録するスタイルです。

一方、もう少し俯瞰的な視点からの記録もあります。ドキュメンテーション型などが代表的です。子どもを羅列的に見て、遊びの群れの中での様子を捉えるやり方です。これらは、どちらかを選ぶのではなく、両方あることが大事です。ただし、現在の保育者が置かれた状況下では、記録にかかる負担は非常に大きいという課題も付け加えておきます。

## 子どもを類型化する見方は頭の中にマップを持つこと

**上垣内●** 俯瞰的に見た記録は大切だと、私も感じます。河邊先生が仰ったように、多人数を保育するには、ある程度、類型化することは重要でしょう。類型化は、頭の中にマップを持つことだと思えますので。

一方、一人ひとりを丁寧に読み取る記録も、もちろん大切です。個を尊重する視点を持ちながら、クラスの一日のダイナミズムをどう捉えるか。容易ではありませんが、これを追求していくことが、本日のテーマである遊びの質を高めるこ



榎原洋一

とにつながるのではないのでしょうか。

保育記録について踏み込んで考えるために、ここでニュージーランドの事例を紹介させていただきます。ニュージーランドには、「テファリキ (Te Whariki)」というカリキュラムがあり、それを評価する「ケイ・ツア・オ・テ・パエ (Kei Tua o te Pae)」というツールがあります。

テファリキは、「エンパワメント」「全体的発達」「家族とコミュニティ」「関係性」という4原則、そして「心身の健康」「所属感」「貢献」「コミュニケーション」「探求」という5要素によって構成されています。「子どもが何かできるようになる」ことを目指すのではなく、有能な学び手である子どもがどのように学んだかというプロセスを非常に大事にするカリキュラムです。そうした保育理念を大事にするためには、それにふさわしい評価の仕方があるという考えから、ストーリーを通じて評価するケイ・ツア・オ・テ・パエが生み出されました。

幼稚園教育要領や保育所保育指針も、しっかりとした保育理念とカリキュラムを提示しているのですから、ニュージーランドのようなすっきりとした評価や記録の制度を検討しても良いのではないのでしょうか。例えば、幼稚園教育要領では、「5領域×心情・意欲・態度」が基本となっていますが、「何をするか」よりも、「保育を通じた心情・意欲・態度の育ちを見ていく」という視点にふさわしい、評価と記録のツールがあるといいと思います。

## 遊びはあくまでプロセス優先 コンテンツは代替可能

**榎原●** ここで会場からご質問を受け付けたいと思います。

**会場** 山形県の私立幼稚園の理事長兼園

長です。Guided playについて、個人的な経験を交えて質問させてください。私の趣味の釣りに、息子を幼児期から連れて行っていました。基本的な安全対策やルールを教え、最低限の釣り方を教えただけで、後はできるだけ子どものやりたいようにやらせました。口出ししたくなることは多々ありましたが、堪えていると、自己流で釣果を上げるようになり、今では私を超える釣り好きになりました。こうしたやり方も、Guided playと言えるのでしょうか。

**河邊●** 鳥取大学の「コホート研究」ではまさにそのことを研究しています。小学生の生活満足度を調査していますが、親の心配の多くは杞憂で、子どもは満足して生活しているという結論を提示し、保護者の過保護や過干渉があると、社会性の獲得にブレーキがかかると指摘しています。今のご質問で言えば、父親とい

う憧れのモデルがいて、安全が保障された上で、自己探索できる自由度がある。そして、ある程度の認めもある。抜群の学習環境と言えるのではないのでしょうか。私が、Guided playで懸念しているのは、学ばせるために、いわば遊びが利用されることです。今お話しされたような学び方は、とても良いと思います。

**上垣内●** 河邊先生が懸念されている点は、遊びがコンテンツ優先になり、いかに効率良く身につけるかばかりを追求してしまうことだと思います。コンテンツではなく、あくまでプロセス優先であるべきだと、私も思います。誰と、どのように学んだかということから、ストーリーが生まれるのだと思います。コンテンツは代替可能と言えます。

**榊原●** とても重要なご指摘が多々ありました。本日はどうもありがとうございました。

panel discussion

# 3-2

## 園種別ワークショップ

遊びの質を高める保育のあり方

### Workshop

#### 「遊びが 学びの保育」の 実現を阻むもの

第2部のワークショップは、公私立、また幼稚園、保育所の枠を超え、保育者が『遊びが学びの保育』の実現を阻むもの』について率直に語り合う場となった。幼稚園と保育所のグループに分かれて議論した内容を発表し合い、全体で共有した。ファシリテーターは、幼稚園グループは玉川大学准教授の大豆生田啓友先生、保育所グループはベネッセ教育総合研究所発行の『これからの幼児教育』編集長の橋村美穂子が務めた。



#### いかに若手をフォローして 保育者の資質を高めていくか

はじめに幼稚園グループの議論の内容を見てみよう。参加者は、公立幼稚園長2名、私立幼稚園主任、公立幼稚園出身の幼稚園教員養成課程講師の計4名。自己紹介を経て、「遊びが学びの保育」を展開する上での課題を付せんに入記することから始まった。

以下、議論の一部を掲載する。

.....  
**大豆生田●** 全員が保育者の資質に関する課題を記入しています。

**台東区・公立幼稚園長●** 特に若い保育者は自身が遊んだ経験が少なく、「こういう遊びが楽しいだろう」というイメージが湧きづらいようです。現場の中で経験させる必要があると感じます。

**品川区・公立幼稚園長●** 保育雑誌などを読んで勉強しても、自分が体験していないため、その活動を通して何を感じさせるかといった深いところまで考えずに進めてしまう保育者も見られます。

**幼稚園教員養成課程講師●** 経験が少ないことが、子どもの遊びの意味や面白さを読み取る力の弱さにつながっているように思います。

**台東区・公立幼稚園長●** 経験を通して次第にレベルアップするので現場に入ってからでも間に合わないことはないと思います。ただ、最初から、予測したり、とっさの援助をしたりする力を期待するのは難しいかもしれません。

**江戸川区・私立幼稚園主任●** 自身の経験が少ないほか、単に忘れているケー

スも多いと思います。養成課程では、「そういうえ、こんなことをして遊んだ」「あの遊びが面白かった」などと思い出させる指導が必要でしょう。

**品川区・公立幼稚園長**● 逆に経験が多い人の落とし穴が、自分の経験だけで判断してしまうことです。目の前の子どもの思考や工夫を見ようとせず、「こう展開するはず」と先読みし過ぎてしまうことがあります。

**台東区・公立幼稚園長**● オールマイティである必要はありませんが、1つのことを突き詰めて何かを見出した保育者は、他のことも深い視点で見られるような気がします。

**大豆生田**● 経験が少ない保育者は、主に学び合いにより育つのでしょうか。

**品川区・公立幼稚園長**● 確かに保育者同士の学び合いは大切ですが、若手ばかりの園では難しくなります。有難いことに私の園にはベテランの保育者がいますが、苦勞されている園は多いようです。園長と若い担任の間に、経験のある保育者がいてフォローできると上手く回ると思います。

**大豆生田**● 中間的な存在の役割が大きいということですね。

**品川区・公立幼稚園長**● そうですね。保育は言葉で教えられる以上に、見て学ぶことが多いと思いますので。

**大豆生田**● 保育者の資質を生かすためには、「やりたいことができる」という風土も大切だと思います。

**台東区・公立幼稚園長**● そこは園長の考え方が大きいと思います。

**江戸川区・私立幼稚園主任**● まず保育者によってワクワクするポイントが違うことから認める風土が大切ではないでしょうか。保育者が生き生きと保育できる環境が、豊かな遊びをつくる根っこになると思います。また、いかに保育者に自信を持たせ、失敗を許容する環境をつくるかがキーになるのでは

ないでしょうか。

**大豆生田**● 最近の保護者からは、「小学校に備えて英語を教えてほしい」「文字の読み書きを教えてほしい」というような声がよく聞こえてきます。

**台東区・公立幼稚園長**● 保護者には遊びの大切さを伝えていますが、難しいのは、英語や読み書きなどを大切にする園も存在することです。そういう園を否定するような表現はできませんので。

**品川区・公立幼稚園長**● 入園保護者会などでは映像を活用し、「この遊びの中で、こんな体験をして、こういう育ちにつながっています」と説明するようにしています。どうしても目に見える成果が優先されがちですが、それにめげず、遊びの大切さを発信し続けることが、私たちの使命だと思っています。

**幼稚園教員養成課程講師**● 保護者にも、遊びのプロセスを一緒に経験してもらうというやり方もありそうです。

**品川区・公立幼稚園長**● そうですね。保護者会では、子どもの活動に似たグループワークを体験してもらうなどしています。

**幼稚園教員養成課程講師**● 一人ひとりの子どもの姿を通し、「こんなふうに変わってきた」「物事に意欲的に取り組めるようになった」などと説明すると納得してもらいやすいと思います。「3歳のときには何もできなかったのに、す



ごい成長ですね」などと、少し長いプロセスで成長を知らせることも必要でしょう。

**江戸川区・私立幼稚園主任**● 保護者だけではなく、社会が幼稚園に対して抱くイメージがずれていることも多い気がします。例えば、幼稚園の活動というと鼓笛隊などを思い浮かべる方が多いのですが、そうではなく、遊びが大事であることを、はっきりと伝える必要があります。

## 保育所グループでは 時間・空間の制約が 大きな課題

続いて、保育所グループの議論の様子を見てみよう。こちらは、公設民営保育園長、公立保育園長（2名）、私立保育園長の計4名で議論を行った。

**橋村**● 保育者の資質に関する記入が多いようです。

**山形県・私立保育園長**● 先生がワクワクできないと、遊びは広げられないと思います。

**江東区・公設民営保育園長**● それは先生が主導するということですか。

**山形県・私立保育園長**● 保育者が遊びの中心になるというより、共感できるかどうかということです。子どもと遊びを分かち合えるか、とも言えます。例えば、石をひっくり返すと、ダンゴムシがうじゃうじゃと出てくる。子どもと一緒に、ひっくり返す瞬間を楽しめるかどうかが大事です。

**北区・公立保育園長**● 保育者が遊びの中に入っていくことは、逆に言えば、子どもの遊びを奪ってしまう危険性もあります。それを十分に意識した上で、子どもに対して「面白いことを見つけたね」と言ってあげられるかどうかが大事だと思います。

**橋村**● 共感とは、具体的にはどういうことですか。嬉しいことがあった時に共感するとか、そういうことでしょうか。

**山形県・私立保育園長**● 例えば、石をひっくり返してダンゴムシが出てきたら、「わーっ」と、子どもの気持ちに共感しながら演技する。その時には、保育者も一瞬、童心に返ってワクワク感を持つことが大切だと思います。

**北区・公立保育園長**● 「これをしたら、こうなるだろう」という予測を持ちながら、保育者自身も面白いということかもしれません。変な言い方ですが、なかなか「俳優」のように振舞えない保育者が少なくありません。ちょっと固さがあるというか、真面目過ぎるというか。発想に「ねばならない」的などころがあるように感じます。

**品川区・公立保育園長**● 「教えなきゃいけない」と思い込んでいるのではないのでしょうか。若い保育者に対して、「一緒に遊んで、心を通じ合わせるのが大事だよ」と言うと、「遊んでいいんですか?」と驚かれることがあります。安全面の配慮などに精力を使い、なかなか一緒に遊び込めないようです。

**江東区・公設民営保育園長**● 遊びの質とは、どれだけ豊かな体験をしたかということにかかわります。保育者が同じ場面を体験することで共感が生まれますが、保育者自身に体験がないと、遊びの質を判断しづらいように思います。

**北区・公立保育園長**● 体験不足の保育者に体験させることは大切だと思います。ただ、体験だけでは追い付かないため、先輩から話を聞いたり、自分で学んだり、保育者としての資質を伸ばしてあげられるような環境を園がつけることも必要ではないでしょうか。

**江東区・公設民営保育園長**● 今の若手は、自分から何かをすることは少ない

のですが、園長がちょっと石を投げると飛びついて一生懸命にやろうとする素直さがあります。要は、園長があの手この手で保育者の自主性を育てることが大切なのでしょう。だから、保育者の課題を考えるとときに問われるのは、常に園長のあり方だと思います。

**橋村●** 長時間保育に関する意見も出ています。

**山形県・私立保育園長●** 自分の勤務が終わっても保育時間は続きますから、保育者同士が子どもや遊びについて話し合う時間があまり取れません。そこは幼稚園と大きく異なる点です。人的配置にゆとりがあると良いのですが、それも難しいのが現状です。

**江東区・公設民営保育園長●** 勤務時間イコール保育という状況で、プラスアルファの時間を持たないのが悩みです。記録を優先し、保育がお留守になることは許されませんから。延長保育の環境がどうあるべきかという議論も必要だと思います。

**橋村●** 保育の時間と空間の環境には、どちらも保育所ならではの課題がありそうです。特に都内では、園庭が狭かったり、定員を超えて受け入れていたりする園もあります。

**品川区・公立保育園長●** 例えば、ブロックや積み木で遊んでいても、食事の時間には片付けなくてははいけません。遊びと生活のスペースが分かれていれば、連続した遊びができるのですが、それは難しいという保育所はとて多いように思います。

**江東区・公設民営保育園長●** いわゆる細切れの保育は、できるだけ避けたいところです。1時間半や2時間近くかけて遊んでいると、子どもたちが自分から遊びを見つけて、新たな展開を見せる場面に遭遇しますので、本来はたっぷりとした遊びの時間を保障できるといいのですが。

**山形県・私立保育園長●** 保育者にも子どもにも十分な時間の保障がないという話が出ましたが、実は保護者も忙し過ぎることが多いのは、保育所の課題だと思います。

## 幼稚園・保育所ともに 保育者の資質を課題視

各グループから提示された課題が、図①だ。幼稚園・保育所とも、保育者の資質に関する課題が多く挙がった。若手を中心に、遊びの経験が少ない保育者に対するフォローを充実させていくことは、園種を問わず、これからの大きな課題と言えるだろう。

幼稚園と保育所の違いとして、保育所では時間・空間的な制約の大きさが目立った。現場レベルで改善することが難しい課題も含まれるため、今後、政策的な視点からの議論も求められる。

議論の中では、課題の提示だけではなく、改善に結び付きそうな提案も数多くあり、園における遊びのあり方を考えていく上で非常に示唆に富むワークショップとなった。





## 「遊びが学びの保育」の実現を阻むもの

### 【幼稚園グループより】

- ◎保育者について
  - ・保育者自身の遊びの経験が不足していないか
  - ・園長の考えや園全体の文化が、遊びを大切にしているか
  - ・独自性は大事だが、「独善」になっていないか
  - ・養成機関や園での研修に課題はないか
- ◎保護者について
  - ・保護者や社会の幼稚園に対するイメージにずれはないか
  - ・「遊びが学びである」ということが十分に伝わっているか
- ◎環境について
  - ・行事などが増える中で、子どもが十分に遊べているか
  - ・行事が、遊びや生活と乖離していないか
- ◎場所について
  - ・園庭が狭く、遊びが広がらないことがないか
  - ・子どもの遊びに即した建物や設備であるか
- ◎子ども自身の体験について
  - ・子どもの体験を支える計画に課題はないか

### 【保育所グループより】

- ◎保育者について
  - ・保育者自身の遊びの経験が足りているか
  - ・保育者の保育経験は不足していないか
  - ・保育者の層が薄くなり、モデルとなる存在がいないのではないかと（特に私立保育園）
  - ・保育者は子どもに十分に共感できているか
  - ・保育者自身がどれだけ豊かな遊びの経験を積んできたか
  - ・園長は、保育者の自主的な判断をきちんと受け止めているか
- ◎保育の時間と空間について
  - ・保育の時間や空間が細切れになっていないか
  - ・安全面による制約は過度になっていないか
  - ・記録する時間は十分に確保できているか

図①

# 3-3

## 現場と専門家の議論

遊びの質を高める保育のあり方

### free discussion

司会● 榊原洋一 …………… CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授

出席者●

河邊貴子 …………… 聖心女子大学教授

大豆生田啓友 …………… 玉川大学准教授

一見真理子 …………… 国立教育政策研究所総括研究官

磯部頼子 …………… ベネッセ教育総合研究所顧問

品川区・公立保育園長

江東区・公設民営保育園長

北区・公立保育園長

山形県・私立保育園長

幼稚園教員養成課程講師

品川区・公立幼稚園長

台東区・公立幼稚園長

江戸川区・私立幼稚園主任

### 「遊びが学びの 保育」の 実現に向けて

第3部は、これまでのプログラムに参加した先生方によるフリーディスカッションを行った。第1・2部で提示された課題などについての踏み込んだ議論を通し、「遊び」を中心とした保育をいかに充実させ、その意義を社会に広げていくか、具体的な方途を探った。

### 豊かな遊びを保障できる 保育者をどう育てるか

榊原● 皆さん、よろしくお願ひいたします。遊びの質を考える上では、自由遊びと一斉遊びのバランスやあり方を考えることが欠かせないと思います。まず、この点についてのご意見をお聞かせください。

河邊● 自由遊びが一斉遊びかという二択の議論にはあまり意味がなく、形態として両方必要と言えらると思います。子どもの自由な遊びの広がり、一斉遊びが上手く絡むように仕向けることが大切でしょう。

幼稚園教員養成課程講師● そうですね。1人ではできない遊びを皆で体験する中で、全体としての遊びが広がり、そこから個々の遊びに派生していく。そのように共通体験がきっかけとなり、それぞれの世界が広がることはよくあります。私の園では、自由遊びと一斉遊び、普通の遊びと行事、また生活と遊びをスムーズに行き来させることが大事だと、よく話しています。

磯部● 遊びの種類は実にさまざまですが、最低限のルールが分かっているれば、誰でも参加できるような活動は、

特に一斉遊びに向いていると言えるでしょう。

**神原●** 子どもの姿を読み取り、遊びを展開させるのが保育者の役割ですが、第2部のワークショップでは、保育者の資質がなかなか育たないという課題が挙がりました。この点について議論を深めたいと思います。

**江戸川区・私立幼稚園主任●** 1人の保育者の経験には限界がありますから、チーム保育の視点を大切にすべきでしょう。例えば、「この先生は砂場遊びが得意だ、あの先生は木登りを教えてくれる」といったことを子どもたちが分かっていたら、それぞれの経験が生かされ、相乗効果が生まれます。保育者は、園長が知らない経験や得意分野を持っているものです。そういう長所を自分から出したいくなるような土壌をつくることで、自ずと子どもの遊びは豊かになっていくと思います。

**台東区・公立幼稚園長●** 今のお話を聞いて、それぞれの保育者の良いところを生かす保育っていいな、と思いました。チーム保育という言葉で思い出したのが、数年前、幼稚園と保育所の一体化に向けて、保育士さんと組んで保育をしたことです。この時、2人だから2倍見とれたかということ、1人の子どもに同じ注意をしてしまったり、2人とも見落としてしまったりして、なかなか上手くいきませんでした。複数担任が一般的な保育士さんは、慣れているのかもしれませんが。

**北区・公立保育園長●** 公立保育園では複数担任制が一般的ですが、チーム保育は情報交換が鍵だと思います。常に2人が同時に見ているわけではないので、「○○ちゃんは、こうだったよ」と伝え合って共有します。こうした報告は、自分の保育を振り返る機会にもなります。保育者の組み合わせは、子どもの育成面を考え、ベテランと若手を



一緒にすることが多いです。

**河邊●** 公立幼稚園の多くは単学級ですので、経験の少ない保育者が他の学級を見て学ぶことが難しくなっています。そのため、異年齢保育を行ったり、複数の保育者がかかわって影響を与え合う場面を意識して設けることが大事です。

**品川区・公立保育園長●** 私の園では、あえて若い保育者を担任にして「あなたが頑張らないと、子どもは伸びないよ」と発破をかけました。先輩と一緒にすると、どうしても頼ってしまい、なかなか伸びないという課題をずっと抱えていたためです。すると、とても頑張ってくれて、良いクラスをつくりました。「よくやったね」と褒めると、「頑張ってたよ良かった」と泣きながら喜び、「来年も頑張る」と言ってくれました。園長としては大きな冒険でしたが、非常に良い結果となりました。

**品川区・公立幼稚園長●** 私も園長になる前にチーム保育を経験しました。一緒に教材を研究し、異なる視点から子どもたちの姿を捉えて評価をする中で、保育者として大きな学びがありました。特に、自分とは異なる捉え方を知って見方が広がり、次につながられたことが大きかったと思います。今、私の園では、比較的経験が豊富で、自分だけで完結させられる保育者が多いのですが、他の見方を知るとさらなる工夫が

生まれますから、保育者同士が気兼ねなく学び合える仕組みをつくることを心がけています。

**江戸川区・私立幼稚園主任●** 工夫はとても大事だと、私も思います。工夫して、上手くいたり、いかなかったりという繰り返しにより、遊びは広がっていきます。ですから、保育者がいかに主体的に工夫できるようにするかを考える必要があると思います。例えば、保育者が「こんなことをしたい」と言った時、園長が「前例がない」と却下すれば、その工夫はつぶれてしまいます。そもそも工夫には失敗が付き物ですから、失敗を認められなければ、子どもの遊びは広がりません。そこに園長の役割があるのだと思います。

**幼稚園教員養成課程講師●** 保育者によって子どもの姿の読み取り方は違いますから、当然、援助の仕方も異なります。それを同じ土俵に乗せて議論することが大事と考え、保育記録をもとに「何が違ったか」「どうしたかったのか」などと話し合っています。保育や遊びの質を高めるためには、単に経験を積むだけではなく、自分の保育を振り返る視点を持つことが不可欠だと思いますので。綿密な記録を取るのが難しい場合は、園長の私が写真を撮って話し合いを促すなどの工夫をしています。

**大豆生田●** そのように一人ひとりの良さを生かし、保育者同士が学び合っ

ている園は良いですね。素敵な園は、むしろ経験年数が多い保育者ほど、若手から学んでいるものです。そういう園に実習生を送ると、「あの学生さん、とても面白かったよ」などと、学生の良いところまで見つけてくれます。そのような学び合う風土を園内に形成することが、すごく大事だと思います。

## 「遊びが保育」を実践する園で園長に求められる資質とは

**榊原●** 保育者の力を引き出し、園の風土を形成するためには園長の資質が重要であることが、第1・2部でもたびたび触れられました。ここで、園長に求められる資質や心掛けについてお聞きしたいと思います。

**台東区・公立幼稚園長●** 保育者が自由に発言し、支え合える余裕のある雰囲気をつくり出すことではないでしょうか。もちろん、規範意識も大事で、ラフ過ぎるのも良くありませんが、自分の考えを安心して出せる環境はとても大切だと思います。

**山形県・私立保育園長●** 一言で表すと、「保育者の笑顔を絶やさないこと」だと思います。保育者が常に太陽のような笑顔を心がけることで、子どものみならず、保護者にも安心感を与えられます。保育者の笑顔を妨げるものを排除することが、園長の役目だと考え



free discussion



ています。

**品川区・公立幼稚園長●** 私の園でも、「笑顔」がキーワードです。子どもの笑顔をつくり出すために、まず保育者が笑顔で働ける職場をつくることを心がけています。笑顔とは、単に面白さや楽しさから生まれるのではなく、子どもと一緒に保育をつくり出していく充実感から、にじみ出るようなものだと考えています。

**品川区・公立保育園長●** 園長として、上から押さえつけるような言い方はしないように心がけてきました。保育者が自信を持ち、極端なことを言えば、「園長がいなくても大丈夫」と思えるような園をつくりたいと思っています。そんな気持ちが伝わっているのが、若手もベテランも気軽に発言し、時には私が保育者から叱られることもあります。自由な雰囲気の中で保育に専念できていると思います。

**大豆生田●** ミッションを明確にして、一人ひとりの保育者の個性を大事にする園づくりに力を注ぐことが大切でしょう。そういう園には、若手やベテランを問わず、「うちの園では——」と、しっかりと自信を持ってミッションを語る、魅力的な保育者が多いです。

**江東区・公設民営保育園長●** 園長も一保育者ですので、徹底的に保育について語り合うことが大切。常に保育者の目線と園の運営を行う園長の立場で物

事を考えています。そして大きな船に、保育者や子どもと一緒に乗り込むイメージを持ち、それぞれのポジションで役割を果たせるようにサポートする。船の舵取りは園長の役目ですから、常にアンテナを高く保つとともに、アンテナの本数も他の保育者より多く持っている必要があると考えています。

**江戸川区・私立幼稚園主任●** 私立幼稚園は、経営の面がありますから、園児獲得はもちろん大切。しかし、それが一番の目的になってはいけないと思います。保育についてしっかりとした考えを持ち、保護者や地域社会に対して丁寧に語れることが、園長に求められる資質だと思います。また、私が新任の時、園長から「俺がお前を採用した人間だ。俺が採用したのだから、お前は好きなことをやれ。責任は俺が取る」と、はっきりと言われ、安心して保育に専念できました。自分もそんな園長になりたいと強く思います。

**磯部●** 私自身は、普段は、どこか「遊び人」のような良い意味でのずぼらさを持ちながら、いざという時には責任を持って判断し、行動する園長を目指してきたつもりです。

## 保護者や地域社会の理解と協力を得るために

**神原●** 保護者や地域社会に対し、もっと発信が必要というお話がありましたが、そのあたりはどうお考えでしょうか。

**江戸川区・私立幼稚園主任●** 社会のイメージに迎合しないことが大事でしょう。幼稚園は、自由な「遊び」からかけ離れた一斉活動のイメージで語られることがまだ多いのですが、「それは違う」ときちんと言え伝えることは説明責任だと思います。いろいろな具体的な事例を出しながら、現場の保育者だけではな

く、教育学者などとも連携して説明していく必要があります。

**江東区・公設民営保育園長**● 保護者に対し、私たちがどのような気持ちで保育しているかを伝えることが大切だと思いますが、それは容易ではありません。現在の園に赴任した3年前から、「保育内容をどう伝えるか」「子どもの声をどう届けるか」について、試行錯誤しています。園としての揺るぎない方針を地道に伝えていこうと思い、お便りを工夫したり、掲示板を活用したり、ドキュメンテーションで丁寧に伝えたりしてきました。

**台東区・公立幼稚園長**● 私の園では、ここ3年ほど、ホームページでの情報発信に力を入れています。3日に1度くらいの更新で、日々の保育場面の写真とコメントをアップするうちに、「5歳の姿って、3歳とはずいぶん違いますね」とか、「何でもない遊びだと思ったけど、いろんな意味があるんですね」といった声が聞かれるようになりました。直接言葉で伝えることも大切ですが、こうした補助的な情報発信の効果も実感しています。

**北区・公立保育園長**● 保護者への説明の機会として、「ママ先生」として保護者が保育に参加する場を設けています。保育者の思いを実際の保育場面を通して伝えるのがねらいです。その他に地域社会にも発信していますが、まだ広く浸透させるまでには至っていません。

**品川区・公立保育園長**● 保育者の思いを全ての保護者に理解していただくのは不可能なことなのかもしれません。それでも、少しでも理解していただくために、担任が子どものさまざまな姿を拾って、良い学びをしていることをきちんと伝える努力をしています。

**品川区・公立幼稚園長**● 子どもの姿を通じて保育者の思いを伝えることは、私の園でも心がけています。また公立

幼稚園は地域の中にある教育的資産ですから、その意義や役割を十分に理解してもらえるように、園長として関係諸機関とのネットワークづくりに力を入れています。

**大豆生田**● 子育て支援センターなどの役割も大きいと思います。未就園児の保護者に対し、子どもの発達に大事なことなどを語れるコミュニティができると、園選びの方向が変わってきます。そういうコミュニティはまだ少ないので、今後、地域の子育て支援の場が1つの鍵になりそうです。

**一見**● 日本の保育は個々に工夫をされ、地域で努力を積み上げられています。皆さんのお話を聞いて、「ものづくりジャパン」の基礎は、徹底して遊び込むことの良さに支えられているのかなと感じました。今後、世界のモデルになり得るような素晴らしい事例を海外に発信する仕事に力を入れていく考えです。

**榊原**● 今後の幼児教育を考える上で非常に有益な提案が数多くありました。今後、乗り越えていくべき課題にアプローチするための道筋が見えてきたような思いがします。どうもありがとうございました。

free discussion